

インタビュー調査の反省的検討

——理論枠組みと方法論をめぐって——

塚 田 守*

A Critical Review of Experiences in Interview Studies

—Theoretical Frameworks and Methods—

Mamoru TSUKADA

はじめに

本稿は、筆者がいままで経験したインタビュー調査を方法論的視点から振り返り、今後の調査のあり方を考察するものである。筆者は、調査結果を著作および報告書としてまとめる時、その調査過程についてエッセイ的なタッチで描写をしているが、それを方法論、理論的枠組みとして反省的に検討したことはなかった（1998年、2002年、2004年）。筆者が今まで行ってきた研究の中で、インタビュー調査と分類される研究について、以前に書いた方法論に関するエッセイ的な描写を踏まえ、方法論、理論的枠組みについて反省的にとらえ直すことにより、筆者自身の今後の研究のあり方の一つのヒントになればと考えている。そして、その反省的検討の中で、問題となってきた点に関して、他の調査研究者の方法論に関する論考を参照し、インタビュー調査のあるべき姿を模索したい。

受験体制の「生産者」としての男性の高校教師のインタビュー調査

教師たちによる「語られた生」に興味を持って

筆者は教育社会学の分野で受験体制の中の個人という枠組みで浪人生についての調査研究を行った（1988年）。その後、受験体制が個人に与える影響というテーマを考えていく過程で、受験体制の「重要な参加者」である高校教師を研究対象とすれば、受験体制の理解につながるのではないかと考えた。受験体制を理解するという枠で考えると、浪人生は受験体制の「産物」であるが、高校教師も受験体制の「産物」であり、受験体制を維持する「生産者」であるともみなせるのではないかと考えた。そのような研究関心を持ち、受験体制について高校の教師から「生の声」を聞き取ることによって、愛知県に見られる受験体制の理解を深めることを目的として、この研究を始めた。

* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

インタビューは、「これまでの先生の高校教師としての体験を教えてください」と「高校教育についての意見を言ってください」という二つのお願いで始められた。この二つの質問の目的はあくまでも、受験体制の理解のために、教師自身のさまざまな高等学校での具体的な体験を聞き取ることであり、教育に携わる教師が受験体制をどのように思っているかを聞き取ることであった。その意味で、インタビューの初期段階では、インタビュー対象の教師たちを愛知の教育についての知識や状況について説明してくれる「インフォーマント」と見なししていた。

受験体制について以前行っていた調査に基づく仮説を持ち、聞き取りをしようとしたが、インフォーマントであるはずの教師たちが筆者に熱っぽく語ってくれたのは、「受験体制」「組合時代」、教職における「昇進と出世」についての自分自身の「人生の物語」に変化していったので、調査者である筆者は、教師たちをインフォーマントであると同時に、研究対象者としてとらえ直した。

このインタビュー調査の過程で、教師たちのどのような「人生の物語」が語られたかについて描写し、調査する前には考えることすらしなかった語りとはいかなるものであったかについて簡単に記述する。この調査は、19人の男性高校教師に対して行われたインタビュー調査であったが、その中でも、特に50歳代の教師たちは「組合の時代」の経験について熱っぽく語ってくれた。それは、彼らが新任教員として高校に勤め始めた頃の「青春時代の物語」でもあった。

ここで具体的に記述する語りは3人の50歳代の教師の「組合の時代」についてのものである。

最終的に校長になっていた今井さんは、大学時代から学生運動に関わり組合活動には好意的であったが、勤務先で組合に対しての不信任感を持つ事件を経験し、組合活動に嫌気がさし、その後は、受験進学校に勤務しそこで受験指導に熱心になり、反組合的態度になったという。その事件をきっかけに、組合活動から離反し受験指導を熱心に行い、受験での実績を残し、管理職になった今井さん。大学時代から学生運動にかかわり、新任時代に熱心であった「組合の時代」のその事件の経験により、生き方を変えていったという「管理職教師の物語」は、「組合の時代」の経験を抜きにしては語る事ができず、それほど重要な事件であった。

次に、最後まで「ヒラ教員」として組合活動を続けていた竹内さんの語りは、一貫して組合活動を続けた「民主的な教員」の語りであった。組合がなかった伝統高校に勤務した竹内さんは、職場環境の改善を考えるために、若い事務員や常勤講師を集めて、「愚痴を言う会」を作りよく話し合ったという。1960年代後半に教員のストを決行するまでには、「涙を流し、激論をやった人達が何人かいた」ほど、張り詰めた空気の中で、組合活動に参加していった。竹内さんは、「仲間意識」を形成し、「民主的教育」への熱い思いを語りながら、「組合の時代」を生きたとする。その後、組合活動に参加したことが原因で、「担任はずし」や「不当な」人事異動なども経験した。底辺高校、困難高校を勤務しながら、「中より以下」の生徒を教えることが、自分の教師生活の基本であり、新任時代から組合活動を始め、一貫して「仲間と共に」組合活動を続けてきた。

もう一人の50歳代の教師である青木さんは、新任時代は組合活動に没頭するが、その後組合の人間関係に嫌気がさし、自分の好きだった英語の勉強に学ぶことの喜びを見出

し、英会話をともに勉強する人間関係を楽しみ、受験体制の中で教師としての力を発揮するものの、組合時代の基本的スタンスを崩さず管理職になることを拒否した。青年教師の頃に組合活動に熱心で、県教育委員会が組合つぶしの諸策を仕掛けてくることに対して、ストライキやるかどうかを悩み議論した日々の語り。その語りは、体制に入るか、反体制になるかの切羽詰まったものであった。その後イギリス留学し帰国後受験進学高校に勤務し、「受験エキスパート」としての地位を確立しながらも、組合員であるメンバーシップを維持しながら、管理職にもならず自分の好きな勉強中心の生活をし、再度のイギリス留学を契機に大学教授への転身をした。この青木さんの「人生の物語」も「組合の時代」の体験を踏まえてのことであった。

このように、50歳代の男性教師は、若き教師時代にそれぞれが、異なった形で「組合の時代」を経験し、その異なった経験に従い、その後の生き方を決めていったという「人生の物語」を筆者に語ってくれた。これらの「組合の時代」についての語りとその人生に対する影響は、それぞれ3人の中にある「いま・ここ」で意味ある事件として、インタビューという場で立ち上がってきた「語り」であったと言える。それは、受験体制についての意見だけをデータとして収集しようとした当初の目的とは異なった調査の展開であった。

なぜ、教師たちの「人生の物語」を聞くことになったか

最初は、愛知県の高校の受験体制について話を聞くためのインフォーマントであった高校の教師たちが、インタビューを進めていく過程で、調査対象者になったのはどのような要因によってであろうか。

まず第1に、インタビューは相手の話をそのまま聞くという調査者による「無知の態度」によって進められた結果、教師たちの自由な語りが生まれてきたのではないと言える。調査者である筆者は具体的な研究テーマに関する質問をしていくという形式ではなく、調査対象者に彼ら自身の物語を語ってくれるようお願いし、その語られた意味についての説明を促す立場をとった。Chase（1995年）が論じているように、調査を行う時にインタビューが持っている社会的な用語を使わず日常的な言葉を使い、調査対象者の経験、考え、感情などについて尋ねた時に、「厚い記述」が可能なデータ収集ができるからである。

第2として、筆者が受験体制の理解という漠然としたテーマしか持たず、研究対象者を見るとときに単に教師としての側面だけに限定せず、人としての生き方にも興味を持ち、インタビューにおいても質問を教育現場の体験についてだけに限定しなかったことが、研究対象者が自らの人生の物語を話すきっかけになったのかも知れない。それはアイヴァー・グッドソン（2001年）によるカナダの学校におけるコンピュータ導入計画を検証・評価する研究プロジェクトでのインタビュー調査での経験とも通ずるものである。そのプロジェクトでは、グッドソンたちがインタビューを行い参与観察する過程で、一人の地理教師をコンピュータ導入に反対する「抵抗者」として固定化し、インタビューもそうした固定観念に基づく読み込みにしたがって行っていたが、職業生活を越えた個人的な生活の事情についてその教師が語り始めてから、彼の行動の解釈を変えることができた。その地理教師は50歳を越えた時に父親を亡くし、病気の母親の看病で忙殺されていた状態だった

ので、コンピュータ導入という新しいことを始めることに難色を示しただけで、決して、イデオロギーにもとづいた「抵抗者」ではないことが明らかになった。単なる教育現場の中の教師としての事情だけでなく、人としての生活世界についての語りを聞いた時に初めて、新しい解釈が生まれたのであった。グッドソンの調査で指摘されたように、筆者が行った教師のインタビューにおいても、もし調査者である筆者が学校内だけの問題にテーマを絞り、教師たちにインタビューをしていたなら、教師たちの「人生の物語」を聞き取ることとはなかったであろう。

「フィールドとしての個人」の視点で教師たちのライフヒストリーを書いて

インフォーマントであった教師たちが研究対象者になり、彼らの「人生の物語」が面白くなり、ライフヒストリーを書くことになった。と同時に、さまざまな教師体験に根ざした教育についての言説もまた、愛知の受験体制の当事者の「声」による「厚い記述」を可能にするものであった。教師たちのライフヒストリーを書くことによって、教師たちが多様な生き方をしていた個人であるということを示し、教師たちの個人的な体験、教育に関する「生の声」を描写することによって、学校文化の多様性を教師の視点から描写することができた調査であったと言えるであろう。

受験志向した教師はさまざまであり、「生徒のため」という信念で「管理教育」自体を肯定し、そこにこそ教育があると信じている教師の言説。これは教育論の枠内の議論である「管理教育」対「民主的教育」というイデオロギー論争で解釈ができないことはないが、具体的な教師たちの「声」を引用することにより、「管理教育」をめぐる学校現場の日常的な現実がより明らかにすることができた。

受験体制の枠内で、生徒の前に立つ自分の能力証明だとして受験勉強を教える教師は、受験体制自体を否定しながらも、受験の枠ではそうする以外ないので、その枠内で自分の実力をして示していく。そして、それは、楽しいことでもあると言う教師の存在。この態度を理解することは、一般的な教育論ではできない。むしろ、どのような「思い」で日々の授業を行っているかという当事者の意識解釈があって初めて可能である。

また、「出世・昇進」するために、実績を残そうとする教師の心情は、「年相応の出世がしたい」などという表現などに見られたが、もし教育論の文脈だけで考えていたら、出てこなかった「語り」であった。

さらに、イデオロギー的立場を貫くことが本人の生き方だと信じ続けてきた教師にとって、仲間と共に生きる民主的教育をすることは、イデオロギーを具現化して生きた「人生の物語」である。抽象的なイデオロギー教育論争にしていたならば、日常的な教師の姿の见えない机上のイデオロギー論争になるであろうが、教師の「声」を引用することにより、単なるイデオロギー論争の問題ではなく、教師たちの日常的な人間関係の問題として捉えることができた。

以上のような解釈ができたのは、インタビューをする時に、ライフヒストリーの枠で、「フィールドとしての個人」(佐藤 1995年)の視点を入れることによって初めて可能であった。

教師のライフヒストリー研究のまとめ方ははたして妥当か

教師たちの「人生の物語」の面白さに惹かれ、研究を始めた時とは違う形で、教師のライフヒストリー研究としてまとめたのは、果たして妥当であったろうか。現時点から反省的に捉え直してみたい。

まず第1の批判の可能性としては、調査者は初めて聞いた「組合の時代」の語りに新鮮さと驚きで聞き入ってしまい、この調査を展開していくきっかけになったが、「組合の時代」の面白さが前面に出すぎて、教師たちが語ってくれた物語のほかのバージョンを十分に考慮せず、そのことだけを強調しすぎてはいなかったであろうかというものである。さまざまなバージョンで調査研究をまとめることが可能であったにもかかわらず、ひとつの物語に限定することにより、「厚い記述」することの価値を下げてしまっていたかもしれない。ただし、語りのバージョンの多様性の重要性を認識し（小林 1995年）、一つのバージョンを一つの現実解釈として記述すること自体は否定されるべきでないであろう。

第2として、浪人生に関しての研究からの継続を意識しすぎたために、受験体制への関心ごと、テーマを中心にまとめ、すべてのことが受験体制に関係しているような議論をしてしまっていたのではないかという疑問が残っている。高校の体制は、やはり、一般的な概念、受験体制が核にあるのであろうが、他の多様な側面にも焦点を当てるべきであったかもしれない。これは聞き取られた言説をどのように解釈するかという問題であり、実際のデータを解釈する時に、筆者の以前から持っていた解釈枠がどこまで影響しているかを反省的にとらえる視点の重要性を再確認すべき点である。その議論を反省的に捉え直し、以前から持っていた解釈枠組みが修正された時は一つの理論的「発見」と見なされるべきであり、その解釈枠組みが妥当だと見なされた場合には、一つの例証として位置づけられるであろう。

第3として、このようなライフヒストリー研究によって多様な教師がいるということ、教師たち自身の「声」を引用することで厚く記述することにどのような価値があるのであろうか、という問いにどう答えることができるのであろうか。このような疑問に対して、その多様な教師の人生の物語を他の教師が読めば、教師としての生き方を反省的に捉えることになる可能性があるのではないかと答えられるのではないかと、筆者としては考える。また、教師以外の人を読むことにより、「人としての教師」の内面世界の理解が可能になり、ステレオタイプ化された教師のイメージを修正し、教育現場という社会状況の中で葛藤する個人としてみる視点が可能になるのではないとも言えるであろう。

女性教師たちのライフヒストリーへの展開

女性教師たちの研究を始める出発点となったのは、「男性の教師だけを扱っているだけでは、教師研究にならない」と言ったある女性教師からの批判であった。女性教師を男性教師と比較する目的で、男性教師には意味のあった受験体制、組合の時代についての聞き取りを女性教師に対して始めた。しかし、結婚している女性教師たちによって実際に話された語りには、「組合の時代」「出世・昇進」「受験体制」についてのことは含まれず、「職場と家庭の両立」あるいは「家事に関する男女間の平等」が主な話題であった。それは単に、女性が「私的な領域」に生き生きとした語りをするという理由だけからではなく、家

事・育児を含む家庭に関わることを語ることなくしては、女性教師たちの職業生活の物語は不可能であったからでもある。

その結果、「世代による差」「ジェンダーによる差」がこの調査での中心的テーマになった。それは女性の地位が変化し、男女間の平等が当然のこととされていた教育職場にいなながらも、女性教師たちは、男性教師たちとはまったく違った「生活世界の現実」に直面し、行動面、意識面で異なったことを経験する傾向があるという研究上の「発見」であった。逆に言えば、日本の受験体制は、男性的な社会の核になっているものであり、女性的論理はそこにはなかった。

男性教師たちと同じ問い方、「これまでの先生の高校教師としての体験を教えてください」と「高校教育についての意見を言ってください」という同じ2つの質問でインタビューをしたにもかかわらず、女性教師たちの語りは、「職場と家庭の両立」「家事に関する男女間の不平等」というものになったのは、どのような要因があったのであろうか。

まず第1に、以前の研究と同じであるが、「無知の態度」で人生の物語を聞く立場をとったからであろう。男性教師たちの関心ごとと比較をするために、受験体制について尋ねたが、女性教師たちはその問いには興味を示さず、自分の「人生の物語」を語り始め、それに興味を持った調査者である筆者が彼女たちの語るままに、聞き取りをした結果であった。また、質問の仕方も、男性教師の時と同じように、「先生の経験を教えてください」ということを全面的に出し、本人の「生きた生」についての語りを促したこともそのような展開を促す要因であったかもしれない。

もうひとつの要因として考えられるのは、男性である調査者が一般的な男性役割を果たすだけでなく、家庭において女性役割の一部を担っていることによる共感的聞き取りの態度があったからであろう。働きながら家事をする時に起こる時間的に束縛された生活を共感的に理解できるほど家事労働をしている調査者によるインタビューだったから、女性教師たちのこのような語りが生まれたのであろう。

インタビューをまとめ公開すること

最初から教師たちのライフヒストリーを書くということを明言せずに、インタビューをしていく過程で、私的で個人的な出来事に関する語りを聞き出すという手法をとっていた。この手法をとったために、調査対象者自身によって語られた「経験した生」が、調査者によって詳細に記述され、「人生の物語」としてまとめられることを予想しなかった教師の一人は、調査者がまとめて送った彼女のライフヒストリーの「公開」を拒否したいという電話をしてきて、公開ができなかった例があった。筆者は、活発で輝かしい教師としての公の生活の裏にある彼女の苦勞、苦難に焦点を当てることによって、「元気の源」を説明するという論理でライフヒストリーをまとめた。しかし、彼女は、他人にはほとんど話したことのない話を、酒の勢いとインタビューという特殊な状況で「語ってしまったこと」を後悔した。彼女の感覚では、赤裸々に書かれた自らの私的な部分を公開することなど容認することができなかった。「双方、痛みわけだから、その原稿を使わないでください」と涙で訴えられた。調査者である筆者には、彼女の話が聞けたことだけでもすばらしいことであり満足できたことであったが、数十時間をかけてテープ起こしをし、筆者が「意味ある物語」と考えたストーリーとしてまとめた後、それを公開できないという結果

になったのは、「痛み分け」ではなく、「約束が違う」という思いであった。しかし、調査対象であったその教師にしてみれば、「約束が違う」まとめ方であった。どのようにまとめるかを調査対象者に説明することなどは、話を聞いて物語をつむぎだした後にしか言えないことであるが、調査対象者と調査者の立場の違いが、このような形で明確になったケースである。

筆者の調査の中では、このようなケースは、唯一このケースだけである。男性教師が「公的なストーリー」を語り、実名で出してくれてもよいというほどに、時には、政治的、戦略的な形で「人生の物語」を調査者に語ったのに対して、女性の教師の場合は、家族、特に夫、あるいは同僚に対しての「怒り」「不満」という感情レベルの「私的なストーリー」を語っていたにもかかわらず、調査者がまとめた草案を読み、校正の段階で赤ペンを入れ、「語り不足」だった点に関しては、一部修正するという作業をして返却してくれた。筆者がまとめた草案は彼女たちが語った「人生の物語」として納得のいくものであるとして受け入れられた。ただし、草案を郵送した後、「今後は自宅ではなく、学校に送ってくれるように」というコメントが2人からあった。「不満」「不平」「怒り」を夫、家族が直接読むと問題になるという認識がそこにあった。

以上、インタビューをまとめ公開する時には、調査対象者のプライバシーの問題を考慮することが、インタビュー調査には重要であるということを確認した経験であった。

アメリカの教師のインタビューから学んで

教師の日米比較研究を構想した出発点は、日本の教師についてのライフヒストリーを研究に基づき、それまでやってきているアメリカ研究に関する知識を生かして、日米比較の視点で日本の教師とアメリカの教師を比較することは重要ではないかというものであった。その発想で、3年間、毎年3週間ほど、カリフォルニア州のサン・ホセに行き、インタビュー調査をした。

日本とは異なり、研究対象者を探すという難問があったが、当時、科研で共同研究としていたカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校のジューン・ゴードン教授が、カリフォルニア州立大学サン・ホセ校のバーバーバラ・ガッテスマン教授に依頼して、研究対象者を探す協力をしてくれた。ガッテスマン教授は、教育学部の大学院で教えている人物で、教えている授業には管理職をめざす現役教師が多く、大学院全体の学生から探してくれ、3年間で13人の現役教師、元教師に対してそれぞれ2時間以上のインタビューができた。海外でのインタビュー調査で鍵となるのは、研究協力者の存在であると実感した。

日本でのインタビューの経験から、教職経験が長く年齢が高い方が、「人生の物語」が面白いと思えたので、20年以上の教職体験があり年齢が50歳以上であること、また、アメリカ社会の特徴も考えて、人種民族的に多様な人々であることを条件に、調査対象者を探して欲しいと依頼した。このような研究対象者の枠自体が、すでに、アメリカ社会を人種民族で説明しようとする前提があったという点で反省すべきであるが、それまでのアメリカ研究の経験から、アメリカを論じるときには、人種民族の視点をいれるべきであるという経験知にもとづいたものであった。

インタビューの仕方は、日本の教師と同じように、アメリカの教育について教えてもら

うという形式をとりながら、それぞれの教育に関する言説を聞いたが、実際は、それぞれの具体的な経験などを聞きながら、「人生の物語」の聞き取りを目的とした。最初から、「あなたのライフヒストリー」を聞きたいというと研究対象者が見つかりにくいと考え、日本の教師に対するのと同じインタビューの仕方を取った。

「語られた生」の物語は、離婚という契機を含む「女性の自立の物語」「教育改革者の物語」「公民権運動の物語」「マイノリティの物語」「差別と闘う物語」「家族を重視する物語」「移民の物語」などであり、日本とは違うアメリカ社会の文化、歴史的背景から生まれた「異なった人生の物語」であった(塚田 2004年)。

この研究での重要なスタンスとしては、一般的なアメリカ研究者がよくやるような、図書館での文献研究をし、アメリカ人によるアメリカ社会の分析をそのまま輸入解説するものであってはならないということであった。また、アメリカに住み、アメリカについての報告と称して、個人的体験をあたかも研究であるかのように、エッセイタッチで書く研究には満足すべきではないということでもあった。自分でデータを集め、日本人という自分の目で、アメリカ社会を見て、自分なりの独自の分析をするというスタンスである。それは、竹内洋(1992年)の「あとがき」にも見られた外国研究への心構えである。

インタビューは共同作品であるという経験

アメリカ教師の研究の中で調査対象者の一人になった女性教師に、特殊教育に携わった経験を聞き、なぜ特殊教育に関わるようになったかなどの質問をした。その質問に対して、恵まれた子供時代を生きた彼女は、「豊かであることの後ろめたさ」「弱者のために働きたい」という「正義感」から、障害者教育を大学で専攻するようになったという説明をした。大学時代、障害者教育にたいするボランティア活動をやっていたことも、その分野に進む要因になったのではないかという説明であった。

そして、彼女がなぜ離婚したかという話になり、1970年代後半のフェミニズム運動がそれに関わっていたということに話が及んだ。調査者である筆者がフェミニズム運動、公民権運動、学生運動に興味を持ち、かつて日本の大学院の修士論文で1960年代の学生運動の研究をしていたということを言った後、調査対象者である彼女自身が1960年代にパークレイにいて、実際、フリースピーチ・ムーブメント(Free Speech Movement)に参加していたことに触れ、そのときの興奮と情熱について、熱っぽく語り始めた。学部長として忙しい彼女がそろそろインタビューを終わらなければならないと言っていた時であった。それから30分以上も学生運動に参加していた頃について詳しく語った。その体験は、彼女が正義感の重要性を実感し、社会を変革できる、人を変えられるという信念を持つきっかけになったという語りが発展していった。その体験の後、教師は社会、人に影響できる職業であると考えようになり、結局、その体験が、障害者教育を専門とする教師になった直接的な要因になったのでなかったと語った。学生時代に活動家であったことなど長い間誰にも話したことはなかったけれど、この体験のインパクトは彼女の原点であったと、振り返る語りを聞いたことで、彼女のライフヒストリーの描写の仕方が決定された。

この学生運動体験の語りは、調査者である筆者が1960年代のアメリカの学生運動をテーマとして修士論文を書いたことをたまたま言ったことがきっかけになり、熱く語られ、詳細に説明され、障害者教育を専門とする教師になった本当の要因であったかもしれないと

いう語りへの、教師になった動機・要因についての彼女自身の解釈の修正を生み出した。もし調査者がかつて行った研究について話していなかったら、障害者教育を専門とする教師になった直接的要因についての体験の語りを聞くことができなかったかもしれない。その意味で、学生運動の体験の語りは、学生運動についての知識を持っている調査者とその知識を持っていることを知った調査対象者の相互作用が生み出したものと言えるであろう。

むすびに代えて

本稿を書く動機は、この10年ほど行ってきたインタビュー調査の経験を踏まえ、理論枠組み、データ収集、インタビュー技法などを含む方法論について反省的に捉え直し、今後の研究の新しい展開のヒントを探ることであった。本稿で言及された知見を考え、インタビュー調査の今後の展開をしたい。

まず、当事者の視点を入れる研究は、現実世界の新しい「発見」につながり、新しい理論枠組みを構築する可能性を含んでいるので、当事者の声の分析は重要であるという点である。次に、その当事者の「声」を聞き取るには、常に、「無知の態度」で臨み、相手から何かを学ぶ姿勢で聞き取ることが不可欠である。第3として、学ぶ姿勢と言っても受身的なインタビューを志向するのではなく、インタビューは「語らせるワーク」（桜井 2002年264頁）という態度で臨むべきであり、インタビューでの語りは、インタビュー対象者とインタビュアとの相互作用から生まれるという認識を持つ必要がある。第4として、ライフヒストリーの枠組みでは、インタビューする内容をあらかじめ限定されたテーマにするのではなく、対象者の生活世界の多様性と全体性を重視する「フィールドとしての個人」を視点に入れ、生活のあらゆる側面に関する聞き取りをすべきである。第5として、調査をまとめ公開する時には、調査対象者のプライバシーを配慮し、本人がその内容を納得した上で公開されるべきであるという倫理意識が重要である。

最後に、聞き取り調査の別の意義について触れたい。他者のライフストーリーの聞き取りは、インタビュー調査という特殊な状況での出会いであり、その人が生きた経験を「語られた生」として、インタビュアが聞き共感し、感動する可能性がある調査方法であり、調査対象者にも何らかのカタルシスを与える可能性を持ち（圓田 2001年、塚田 1998年「あとがき」）、そして、それらの物語を読むことは、人々にとって「ストーリーの贈り物」（Atkinson 1995年）になり、影響を与えるものなる可能性を持つものである。

参考文献

Atkinson, Robert 1995年 *The Gift of Stories* Bergin & Garvey.

Chase, Susan 1995年 “Taking Narrative Seriously: Consequences for Method and Theory in Interview Studies,” edited by R. Josselson and A. Lieblich *The Narrative Study of Lives* Vol.3:1-26, Sage Publication.

グッドソン, アイヴァー 藤井泰・山田浩之訳 2001年 『教師のライフヒストリー』晃洋書房。

小林多寿子 1995年 「インタビューからライフヒストリーへ」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂：43-70頁。

- 桜井厚 2002年 『インタビューの社会学』 せりか書房。
- 佐藤健二 1995年 「ライフヒストリー研究の位相」 中野卓・桜井厚編 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂：13-41頁。
- 圓田浩二 2001年 「カタラシスと知的創造のインタビュー」 『社会学評論』 Vol. 52:102-117頁。
- 竹内洋 1993年 『パブリック・スクール——英国式受験とエリート』 講談社。
- Tsukada, Mamoru 1988年 *The Yobiko: The Institutionalized Supplementary Educational Institution in Japan* PhD Dissertation The University of Hawaii.
- 塚田守 1998年 『受験体制と教師のライフコース』 多賀出版。
- 2002年 『女性教師たちのライフヒストリー』 青山社。
- 2004年 『教師のライフコースの日米比較社会学研究』 平成13年度～平成15年度科学研究費補助金成果報告書。